

FAIRY TAIL —
Salamander of the
another One—

そーめん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——俺は、あの勇敢な魔導士のことを忘れることはないだろう。

ナツが死んだ。

その真実を受け入れることの出来ない《妖精の尻尾》フェアリーテイルのメンバー達の前に、もう一人の《火の滅竜魔導士》が現れる。

この出会いは、運命か…必然か…

—— 妖精の尻尾はあるのかなのか、それは永遠の謎、永遠の冒険。

今まさに新たななる冒険が始まろうとしていた。

この作品は原作最終巻のナツ達が百年クエストに向かった後のストーリーとなりま
す。過度なネタバレ要素が含まれる可能性があるのでアニメ勢の方はご注意ください。
軽度のクロスオーバーのタグは他作品からの魔法や地域、キャラを引用している為付
けさせていただいております。

キャラに関しては全くの別人設定となっております。

目次

プロローグ	1
第一話	Salamander
第二話	of the another On
第三話	e
ラVSグレイ	13
ギルド加入試験	ソ
運命なんて	56

1 プロローグ

プロローグ

——百年クエスト——

痛い——

痛いよ——

助けて…ナツ…

グレイ…

エルザ…

ウエンデイ…

ハツピー…

シャルル…

みんな…

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

右の拳に炎を纏った少年があたしの横を通り過ぎた。

その少年の左手は既に失われており、自分の炎で止血した痕が見られた。

少年の拳を、男は受け止める。

少年は火を吹く。

躲される。

少年は蹴りをいれる。

躲される。

片腕のみの少年は体のバランスが取れずその場に倒れ込んだ。

男は少年を嘲笑う如く、力なく倒れる少年を攻撃する。

「やめて…」

ほとんど声は出ていない。こんな掠れ声では…少年の耳には届かないであろう。唇だけが微かに動き、何度も…何度も…あたしは同じ言葉を繰り返した。

周りには今の少年と同じくして力なく倒れる仲間達…。共に戦い…笑い合いあった…何者にも変え難い、かけがえのない仲間たち…。

「やめてよ…」

声を出すたびに腹部が悲鳴をあげ、大量の鮮血が流れる。

少年はあたしの方を向き…笑った。そして再び立ち上がり、男に向かって走って行く。

無理だよ…こんなの…。

「やめてええええええええええ!!! ナツーーーーー!!!」

「俺はぜってえ…諦めねえぞオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

S F
A A
l I
a R
m Y
a
n
d T
e A
r I
L

o
f

t
h
e

a
n
o
t
h
e
r

O
n
e

「夢…?」

ルーシイは自室のベッドで目覚める。部屋の天井が霞んで見える理由が涙だと気づくのに時間はかからなかった。

その涙を拭い、ベッドから起き上がり、シャワールームへ。

熱いお湯を頭から被り、心を落ち着かせようとする。

ガシャン!!!

なにかが落ちる音が聞こえた…鍵は閉めたはずなのに…。

そっか…またアイツが…

ルーシイはタオルを一枚だけ巻き、音がしたりリビングへ足を進ませる。アイツならタオル一枚で充分よね。

そして、リビングへの戸を開ける。

「ちよつとアンタ達!!!勝手に人の部屋に入るなっていつも言ってるでしょうが!!!」

目の前にいつもの仲間達が自分の部屋でくつろぐ光景が広がった。

『よう！ルーシー』

『脱ぎやすい部屋だぜルーシー』

『エルザ見て〜エロい下着〜』

『こ、これは凄いな…』

『ルーシーさんごめんなさい、ごめんなさい』

『なかなかいい部屋じゃない』

幻覚が消えた。いや…ここにみんなが居ないのは分かっている。

アイツがいたから…みんながここに来てたんだ。

そしてルーシーは音の主を発見した。

写真立てだ。フェアリーテイルのみんな撮った写真が入った写真立てが床に落ち

てしまっていた。

ルーシイはそれをそつと拾い上げる。その写真の中には、威勢のいい笑顔で笑う《ナツ》の姿があつた。

再び視界が歪む…。ポタ、ポタつと写真に涙が落ちた。

「ナツ…!!」

一週間前…ナツは、死んだ。

百年クエスト。百年間誰もクリア出来なかつたクエストの総称。

それを受注したルーシイ達フェアリーテイル最強チームは、イシユガルの最辺境に位置する《黒の迷宮》と言われる洞窟へ向かつた。

《ゼレフ書の悪魔崇拜団体 イルミナテイ》の殲滅。

途中までは順調だった。《イルミナテイ》の下つ端達は《ラグナロク》にて最も大きな功績を残したフェアリーテイルのメンバーにはそれほどまでの強さには感じなかつた。

しかし…

《七つの大罪》を名乗る七人の《イルミナテイ》の幹部のたつた一人の魔導士よつて

チームは半壊。全員が瀕死の重症を負った。

しかし、それでも一人で大罪の一人に向かっていったナツは…相手の魔法により跡形もなく姿を消した。

その後《イルミナティ》も《黒の洞窟》から姿を消し、クエストは失敗。百年間も誰もクリア出来なかったクエストだ、失敗したとしても『仕方ない』で済まされる。

だが…失ったものは、何よりも大きかった。

ゼレフを倒し、アクノロギアを倒したナツが…たつた一人の魔導士に殺されたのだ。

ギルドメンバーはナツの死を受け入れることが出来なかった…泣き、叫び、悲しみ…。全員が抜け殻のようにその場にうずくまった。

フェアリーテイルのメンバーだけではない。セイバートゥース、ラミアスケイル、マーメイドヒール、ブルーペガサス、クワトロケルベロス、クリムソルシエール…。議員やフィオーレ王国までもが、ナツの死を嘆いた。

ルーシイは今日もギルドへ向う。本当はどこにも行きたくはない…だが、一人であるのが辛いのだ。

ルーシイは重い足を動かし、ギルドに向かって歩き始めた。

——マグノリア——

「腹減ったア……」

目元まで伸びる黒い髪。背負ったリュックサックには大きなテント。この少年の目の先には…一つのギルド。

妖精の尻尾はあるのかなのか…それは永遠の謎…永遠の冒険。

冒険は終わることは無い。

今まさに新たな冒険が始まろうとしていた。

一人の少年の手によって。

「妖精の尻尾…か…」

フィオーレ王国、ここは魔法が溢れる世界。

そこに、一つのお騒がせギルドがあつた——

その名も…

妖精の尻尾
フェアリーテイル

第一話

Salamander of the
another One

「なんで誰も責めねえんだよ!!!」

日中、フェアリーテイル。薄暗い店内の中で、一人の男が立ち上がった。

グレイだ…。

「俺たちは…死んだナツを置いて逃げてきたんだぞ…!!あいつは俺たちにクエストのクリアを託した…なのに…俺たちは…」

「グレイ…落ち着け、お前らのせいじゃねえ。」

立ち上がったグレイをエルフマンが制す。

そうだ…誰も責められるわけがないのだ。元々《イルミナティ》は戦闘特化集団では無かったのだ。百年クリアされなかった理由はゼレフ書の悪魔の《加護の呪い》が奴らを守っていたから…。つまり、ゼレフが死んだいま《イルミナティ》はただの宗教団体のはずであった。

しかし突如現れた《七つの大罪》。評議員のビンゴブックや《闇ギルド》にもその名前は登録されていないかった。

いたのか…ドラゴンスレイヤーが一人減れば自分の存在価値が上がるとでも思っているやがったのか!? 違えだろ!!

お前は自分を偽ってるだけだ!!

「お、おいやめろお前ら!」

「グレイ様!」

「ガジル!」

ジュビアやレビイを初めとしたメンバーが二人の喧嘩を止めようと抑えるが、二人は止まらずお互いを睨みつける。

その視線は…今までの《敵》を見る目と同じだった。

憎い、邪魔…その感情が二人の視線から滲み出ている。

「やめてよ!!!」

突如発せられた声に、一同は動きを止める。その声の主、ハッピーは二人の元へ駆け寄り、今にも泣き出しそうな声で口を開いた。

「やめてよ…ナツはこんな事望んでないよ…。ナツはそんな目で《仲間》を見ないよ!!」
ハッピーはそう言ったあと、振り向きルーシイに近寄る。

「ねえルーシイ…なんでナツは死んじやったの？なんでオイラを置いて行っちゃったの？なんで…なんで…」

「っ…!!」

ハッピーの涙で崩れた顔を見た途端に、ルーシイはハッピーを抱きしめた。自分の目にも涙が宿る。

「なんで死んじやったんだよおおお!!」

ハッピーの悲痛の叫び声はギルド中に広まった。

ギルドメンバーは俯き、元の場所へ戻る。涙を流すもの、虚ろな表情になるもの、ギルドを出て自分の家に帰るもの…。

もう、戻ってこないのだろうか…。あの楽しかった日々は…。

「ごめんね…ルーシイ…。」

そう言ったハッピーはルーシイの胸から顔を離すと、ギルドをあとにした。

「ごめん…ウエンデイ、シャルル…あたしも…今日は帰るね。」

「る、ルーシイさん…。」

「ウエンデイ」

何かを言いかけたウエンデイの手を掴んだシャルルは無言で首を振った。

ウエンディは一人ギルドをあとにするルーシイの姿を見ていることしか出来なかった。

ドンっ!!

「きやつ!!」

突然ギルドの入口から現れた人影にルーシイは激突し、その場に尻餅をつく。

人影はルーシイに気づくと、口を開いた。

「おっと、悪いな。前見て歩かなきゃあぶねえぜ?大丈夫か?」

差し出された大きな手から、この人影が男性であることを察した。依頼人かな?そう思いながらも、ルーシイは差し出された手を握り体を起こす。

「あ、ありがとう…ごめんね…っ!!」

に入っていく。

周りの視線に気付いていないのか、少年は笑みを顔に浮かべたまま受付のミラの方へ向かって歩いていった。もちろんミラも少年を虚ろな表情で見つめたまま、少年が自分に話しかけるのを待った。

「あの…」

「ええ!? あ、はい…依頼ですか?」

「ああ…えーつと…」

少年は息を大きく吸い込み、口を開いた。

「俺、妖精フェアリーテイルの尻尾に入りに来たんですけど」

この少年の言葉に、ギルドメンバーがピクリと動く。ナツに似た少年が…ギルドに…。

「マスターいますか? それともおねーさんがマスター?」

ミラさんは一度驚愕の表情に移ったが、いつもの気前の良い笑顔に戻ると少年の質問に答える。

「ああ、ごめんなさいね。マスターは評議員の方に会いに行つてもう三日程帰つてこないの…。ギルドメンバー認証は今は出来ないのよ」

「ええ!? そ、そんなア…折角早めに着こうと思つて来たのに…。ハッ!! そうだ、飯は出せ

ます!?!俺お腹ペコペコで…三日何も食ってないんすよ…」

「え、ええそれならいいけど…何にします?」

「えーつと…じゃあ…」

少年はミラさんから差し出されたメニューを見ながら答える。

「じゃあこのファイアパスタで!」

「…!!」

ファイアパスタ…ほぼナツ専用と言っても過言では無いメニュー。ミラさんは再び驚愕の表情をして少年を数秒見つめた。

「あ…こ、これは普通の人は食べられなくて…。その、違うのにしたら?」

「いやこれで」

少年はニヤツと笑ったあと、後ろを振り向き空いている席がないか探す。そして…

「この席いい?お嬢さん」

「え?あつはい!」

ウエンデイの真正面に腰掛けた少年は重そうなりユックサックを地面に置き、パスタが出るのを待つ。

未だに驚きが消えない一同は、少年を見つめ、固まったままだ。

すると…

「おい」

「ん？」

「グレイさん…」

グレイが少年の横に突然移動していたのだ。グレイは少年を視線に捉えたまま口を開く。

「いま、ギルドメンバーの募集はしてねえ、悪いが帰ってくれ」

「お前がマスター？」

「ちがう」

「じゃあ却下。何が悲しくて所属魔導士の言うことなんて聞かなきゃならねえんだよ。」

「…っ!!」

「それによ…なんだこの辛気臭い雰囲気は？」

「お前に何がわかる…」

「なにも。ただ…これがアクノロギア討伐に最も貢献したギルドとはねえ…とんだ根暗集団じゃねえか」

「…っ!!!」

落ち着いていた様子をしていたグレイだったが、少年の服を勢いよく掴み少年を睨みつけた。

「ちよつとグレイ！」

ルーシイはグレイの体を抑える。今にも飛びかかりそうな勢いで少年を見ていたからだ。

「お？なんだ、やるか？」

少年とグレイは互いを睨み合うが、それを破つたのはグレイからだ。視線をずらし口を開いた。

「やんねえよ……そんな気分じゃねえ……」

「あつそ……なんかあんま歓迎されて無いみてえだし、今日は帰るわ。三日後にまた来る。」

そう言った少年は後ろを振り向き、出口に向かって歩き始めた。再び沈黙が訪れ、ギルドメンバー全員が少年の背中を見ていた。

「まってよ」

ルーシイは無意識に少年を呼び止めた。少年は顔の半分をこちらに向ける。

「名前……聞いてなかったわね。」

少年は顔を出口に戻し、背中だけこちらに見せながら、かつたるような声で答えた。

「ソラ・ドラコチェイン……覚えとけよ。」

再びギルドに沈黙が訪れる。誰一人として喋るものはおらず、耳が痛くなるほどの静寂だった。

理由は先程訪れた少年、《ソラ》。

そして、誰もが思っていた事をウエンデイは不意に口に出した。

「似ていましたね…ナツさんに…」

黙って頷いたあと、シャルルが答える。

「そうね、性格は違ったみたいだけど…顔つきというか、雰囲気というか…」

「似てねえよ」

グレイが呟く。

「アイツとナツは…全然違え…。」

三度、静寂が訪れた。

夜、家に帰る為に川沿いの道を歩いていたらルーシイは横でプルプル震えながら歩くこいぬ座の精霊《ブルー》に話しかけた。

「似てたよね…ソラって人と、ナツ…」

「ブルー」

「ブルーはどう思う?」

「ブルー」

「似てた?」

「ブルー」

「似てなかった?」

「ブルー」

駄目だ…話し相手にならない!! 答えが全部同じ!!

「なんか今日は一段と疲れちゃった…今日は早めに寝よう…」

アパートの鍵を開けたルーシイは靴を乱雑に脱ぎ捨てると、廊下からリビングに向かって駆け足で向かった。

「…」

「…」

ソラとハッピーが互いを見つめあっている。

「猫が喋ってるうううううううううううう!!?」

「ええええええ!!?どこ?どこ?それ売れるよ!!」

「あんたよ!!!そして今更!!」

ソラは頭を抱えながら再び訳の分からないことを口にする。

「あれ?猫ってなんだっけ?」「ワン」って鳴く奴だったっけ?」「それ犬」

「違うよソラ!最近の猫は喋るのが普通なんだよ!」「それが違う」

あー!!!もー何なのこいつ…まるで…!!

まるで…

そう言えばさつきまであんなに落ち込んでたハッピーが…自然に笑ってる…。この人と一緒にいただけで?

『ようルーシイ!』

『ちよつとここあたしの部屋なんですけど!!』

『見てルーシイの貰ったトロフィー綺麗にしといたよ』

『既にボロボロ!!爪立てんな!』

『これからもずつと一緒だろ?』

不意に百年クエストに旅立つ前の会話を思い出す。『ずっと一緒』そう言ったのに…。
どうして?

「う、うう…」

突然涙が溢れ、ルーシイはその場にペタンと座り込んだ。

「ちよつ、ええ!?!おいどうした金髪!」

「ルーシイなんか変なもの食べたの!?!」

「ごめん…ごめんね…。」

ソラは頭をガシガシかいたあと、座り込むルーシイの目の前に座った。そして…

「お前の泣いてる理由は、ギルドの変な雰囲気も関係あんのか?」

「うん…」

「話してみろよ。」

「え?」

「これから俺もお前の仲間になるんだ。変な雰囲気の原因がわかんないんじやあ気持ちわりいだろ？だから…」

ソラはルーシイの頭にポンと手を置き、ニヤツと笑いながら言った。

「もう泣くな」

その言葉を聞いた途端に体中が熱くなった。『泣くな』と言われたのに涙が更に溢れてくる。嗚咽が漏れ、何度も、何度もうなずいた。

「うん…うん…」

「お前もだ猫！」

ルーシイの言葉を聞き、自分も泣きそうになっているハッピーの顔をソラは両手でギュツと潰した。

「お、オイラ猫じゃないよ…オイラハッピーだよ！」

「ああそーういや名前聞いてなかったな。ハッピーか…お前は？金髪」

「え？」

溢れ出る涙を袖で拭っていたルーシイはソラの顔を見る。そして…答える。

「あたしは…ルーシイ。ルーシイ・ハートファイリア！」

そしてルーシイはナツの事を話し始めた。

評議員

「一体何者なのだ!! 《七つの大罪》というのは!?」
「新たなる闇ギルドなのか?」

「ビンゴブツクにも載っていなかったのだぞ！」

「討伐隊を出すか？」

「フェアリーテイルの未来ある若き魔導士が殺されたのだぞ…そこらの魔導士では歯が立たたん。」

「むしろ百年クエストで死者が一人というのは賞賛すべきことではないのか？」

《彼》は黙って耳を評議員に貸していた。その隣で、血のような赤い長い髪をした少女が震えた手を抑えている。

彼女も仲間を守れなかった。誓ったはずだった。誰ひとりとして仲間を殺させないことを…家族を…殺させないことを。

「ならばもう一度六魔の時と同じ様に、フィオーレのギルドから精鋭部隊を」
「却下じゃ!!!」

《彼》は口を開いた。車椅子に乗っていて足は動かせないが、《彼》は隣の少女に合図を送ると、少女は車椅子を押して評議員の真ん中に鎮座した。

「家のガキが一人殺されたんじゃ…黙って見てる親はおらん…。相手が闇ギルドじゃろうが、宗教団体じゃろうが関係ねえ!!」

「ワシら《妖精の尻尾》が、《イルミナティ》を、《七つの大罪》をぶっ潰す」

「いいだろう…では、妖精の尻尾マスター、マカロフ・ドレア…そして、その護衛人工ルザ・スカーレット。ギルドへ戻り魔導士達に伝えるのだ。」

「行くぞ、エルザ」

「はい！マスター！」

運命は…既に動き始めていた。

第二話

ギルド加入試験

ソラVSグレイ

「それがナツ…ねえ…」

ルーシイの家。絨毯の上に座り込んだソラはあたしの話を丁寧に聞いてくれた。時々相槌も打ち、「すげえなあ」とか、「バカだなあ」とか、リアクションも取ってくれるものだから夢中になって話してしまった。

ハルジオンで出会ったことから、アクノロギアを倒した事まで…まるで子供が親に今日あった出来事を話す時のように、笑いながら話した。

「うん…これがナツだよ。」

「最後まで…お前らを守るために戦ったんだな。」

「うん…」

ルーシイは続ける。

「それでね、アンタが凄いナツに似てるんだ。顔とか、雰囲気とか、だからギルドのみんなはあの時すごい動揺してたんだよ。ねえ、アンタ、どこから…」

「くかー…」

って、寝てるし!?この状況で寝る普通!?

ハッピーも一緒になって寝てるし…。

ルーシイはソラの竜の鱗のようなマフラーに触れる。ナツが着けているマフラーは確かイグニールから貰ったものと聞いていた。

だが、ソラは《滅竜魔導士》ではない。そもそも、四百年前から未来へ送られてきた《滅竜魔導士》は五人のみ。ラクリマを埋め込まれたにしても、ナツからラクリマを取り出さないと滅竜魔法は使えないはずだ。

なら、このマフラーは一体…。

そんなことを考えているうちにルーシイは睡魔に襲われた。並んで寝るソラとハッピーに毛布をかけたルーシイはベッドに入り、ゆっくりと瞳を閉じた。

三日の時間が流れた。

ソラとハッピーがギルドの寮に入るまでに家で居候させてくれ、とか言ってきた時は……流石に追いついたわよ。

多分ナツの家にいるんじゃないかな？ハッピーと一緒に行ったし。

今日は評議院に行つてたマスターとエルザが帰ってくる日、そして、ソラが《妖精の尻尾》に加入する日だ。

グレイからは帰れ……って言われてたけど、言われた本人はあんまり気にしてないっぽいし……それに……

「なんであんたらは家にいんのよ!!」

「特訓だよ！今日から早速仕事行けてえしな!!」

「あいさー!!」

フンっ、フンっ、と言いながら絨毯の上で二人は腕立てをする。

「汗臭いわ!!! つか……仕事行くなら《チーム》を組むのが先よ」

「チーム？」

「一緒にクエストに行くメンバーの事、そんなことも知らないの？何人かいた方が分ける前は減るけど早く終わるわよ。」

「へえ…じやあ」

「一緒にチーム組もうぜ!!ルーシイ!!」

「え？」

その時…あたしの中で数年前の記憶が呼び覚ました。

『俺たちでチームを組もう!!ルーシイ!』

「あ、アンタが《妖精の尻尾》に入る事が先でしょ?ほら行くわよ二人とも」

「おう!」「ルーシイエロい下着つけないの?」

「何故今!？」

私たちは、ギルドに向かって足を運んだ。

「到着つと…ソラ、アンタあんまり他のメンバーを煽る行動は取らない方が…」

「たのもー!!!」

「話を最後までできええええ!!!」

ソラは勢いよくギルドのドアを開き、足を踏み入れる。再びソラにギルド中から視線が集まる。

ソラはそんな事は気にしないようで、誰にともなく口を開いた。

「あれ?まだマスター帰ってきてないのか?ハッピー」

「うん、まだ帰ってないみたいだね」

「じゃあ待たせてもらうか。おーい!ルーシィ、一緒に飯食おうぜえ!」

ダメだ…アイツにはモラルやら常識がない…。ゴーン。

「ルーちゃん…」

「ん?どうしたのレビィちゃん」

「あの人…ソラと仲良くなっただね。」

レビィちゃんのソラを見る顔は少し緩くなっていた。

「ナツに似てるから?」

「うん…なんだか…アイツといると…」

ドガシヤアアアアアアアアアア

突然大きな破壊音と共に、ソラが座っていた机が宙を舞った。

グレイが、ソラの机を蹴り飛ばしたのだ。

「なにすんだよ!!」

「この前帰れつて言ったのが聞こえなかったのか?」

「あん?言つたら、所属魔導士の言うこと聞く義理はねえ…。」

「目障りなんだよ…てめえは!!」

「ああ?お前もどうせナツか…!似てるなんて理由で取り消されちやこつちだつて溜まったもんじゃねえんだよ!!」

ソラとグレイは互いを睨みつけ合う。そして…

「ソラつつつたな…表出ろ。俺がテストしてやるよ」

「お前が…《妖精の尻尾》に相応しいかな…」

「はっ!望むところだ…負けて泣きづらかくのはお前だぜ…グレイ」

何も言わずにグレイがルーシイの横を通り過ぎた。続いて、ソラもルーシイの横を通り過ぎる。

他のギルドメンバーもやはりソラの実力が気になるのか、ソラとGLAYの戦いをこの目で見ようと次々とギルドから出る。

二人はギルドの正面に立ち、視線をぶつけ合わせる。

ルーシイの隣にレビイとハッピー、その隣にはウエンデイとシャルル、ガジルが二人を見つめる。

「で？なにしたら勝ちなんだ？」

ソラの問いかけにグレイは簡潔な答えを言った。

『『参りました』：なんてどうだ？』

「だったらお前に勝ち目はねえぜ？」

「こつちのセリフだ。氷漬けにしてやる。」

ウエンデイがルーシイに向かって口を開いた。

「ルーシイさん。ソラさんの魔法は？」

「私にも分からないの：：まだアイツが魔法を使つてるところを見たことない。」

すると、審判役のマカオがソラとグレイを中心として集まるギルドメンバー全員に聞

こえる声で、言った。

「おめエら喧嘩はいいが：：あんまり暴れんなよ。んじや：：」

「スタート!!」

声と同時にグレイが地面をける。

片方の手を握り、片方の手を開く。グレイの魔法《氷の造形魔法》だ。

「アイスメイク…!!!」

「ハンマー!!!」

突如ソラの頭上に現れた氷のハンマーはソラを潰す勢いで落下。

ソラはそれを身軽に右に回避、だが、グレイの猛攻は止まらない。

「アイスメイク…アロー!!」

数十本もの矢がソラを目掛けて飛んでいく。ソラは全力で疾走し、ソラが走った場所にソラを追うように次々と矢が刺さる。

「おもしろえ魔法使うじゃねえか!!」

「褒めてる暇があったら反撃しやがれ…!!アイスメイク!!」

「プリズン!!!」

「…!!?」

氷の牢がソラの頭上から落下。ソラは今まで通り横ステップでそれを交わそうとするが…ハンマーより範囲の大きかったプリズンはソラを牢獄の中に捕らえた。

「なんだこれ?氷の牢?」

「わりいな…ソラ…」

「ちよつとグレイ!!なんで手加減を…」

ルーシイはギルド内に戻ろうとするグレイを反射的に呼び止めた。グレイは振り返り、口を開く。

「ムカつくんだよ…アイツの態度が…まるで…まるで…!!」

その場にいた全員がグレイの言葉の意味を察した。ソラがナツに似ているからこそ…ソラをナツとして見てしまうからこそ…ソラはこのギルドにはいけない。

ナツを忘れる事が…出来ないから。

ピチャ…

静寂の場にひとつの小さな音が聞こえた。水滴が落ちる音…。

グレイは未だに冷気に包まれているソラの場所に振り返った。ソラは仕留めたはず

…まさか…。

「水…だと?」

「もう一度言わせてもらうぜ…お前なんか勘違いしてね?」

冷気の煙からひとつの影が見えた。長いマフラーをなびかせ、その場に堂々と立つている。

その影は右手を肩ほどまで上げ、振りかぶった。

冷気が一気に蒸気と変わり、辺りが熱に包まれる。ルーシイとハッピーそしてグレイ

はソラに視線を移す…そして、目を見開いた。

そこに立っていたのはソラの姿…そして、構えた右手に炎を纏っていた

「俺は魔法使わなかったただけなんだけど…?」

その光景にガジルとウエンデイも体を前のめりにしてソラを見つめた。そして、ルーシイは虚ろの表情のまま、言った。

「あなたも…《ドラゴンスレイヤー火の滅竜魔導士》。」

ありえない。イグニールはナツ以外にも滅竜魔法を教えたというのか? いや、そんなはずはない。この話が本当だとしたらナツと面識がないのはおかしい事であり、アクノロギアに目を付けられなかったことはどう説明するのだろうか。

刹那、ルーシイは心の中で堂々と右手に火を宿す少年に尋ねた。

『あなたは一体…何者なの?』

「なんだボーツとしてんじゃねえよ、クソ氷。」

「だまれ!!」

怒号を発したグレイは再び魔法を構える。

「アイスメイク…ハンマー!!!」

いつもなら空中から落とされるはずのハンマーを掴み、グレイはソラに突進する。ソラは右手を後方に勢いよく伸ばし…言った。

草木が揺れ、大小様々な葉や石が辺りを飛んだ。衝撃が収まったところで、ルーシー達はゆっくりと目を開ける。

二人を包んでいた煙は徐々に晴れ、一つの影が見えた。そして…煙が完全に晴れる。その光景に審判役のマカオは『参りました』は言っていないものの、これ以上の試合続行は不可能と判断したのか、判決を下す。

「お、お前ら!! 試合終了だ…勝者…」

立っていたのはニヤけ顔でマフラーと黒い髪を揺らす少年だった。そして、腕を上へ高々と上げる。

「ソラ・ドラコチェイン!!!」

一瞬の静寂…そして…

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

一気に歓声が巻き起こった。ギルドメンバーはソラの元へ駆け寄る。

「お前さんすっげえな!!」

「ソラ兄かつけえ!!」

「やったなソラ!!」

それを遠目で見るルーシイ、ハッピー、ウエンデイ、シャルル、ガジル、リリー。

「やった!! やったよルーシイ!! ソラが勝ったよ!!」

「うん…! やったね、ソラ!」

「なんで…ソラさんが火の滅竜魔法を?」

「ソラ・ドラコチェイン…アイツ一体何者なのかしら…」

「ギヒツ! もう一人のサラマンダーか…」

「久しぶりに笑うじゃないか…ガジル。」

だが、これで終わりではなかった。

思わぬ歓声に包まれ、驚いた表情をしていたソラの耳に一つの声が響いた。

「まだだ…」

「まだ…俺は言ってるぞ。マカオ!! ぐっ…」

ポロポロになったグレイが立ち上がるうとしていた、しかしもう戦える状態ではな

い、

エルフマンはグレイむけてはな向放った。

「やめろグレイ…お前は十分漢だ。ソラはナツとは違う…。」

「魔法も…同じなのにか!!お前はなにか…ナツと関係があるんじゃないのか…ソラ。」

ソラは抱きつくギルドメンバー達を払うと、グレイに向かって歩き出す。

ジュビアが前に立ちはだかり、それを止める。

「もうやめてくださいソラさん!!このままじゃグレイ様が…」

「安心しろよ、別に殴ったりするわけじゃない。」

ソラは立ち上がろうとするグレイの前に立ち、口を開いた。

「お前にとって…ナツってなんだ?ギルドにとって…ナツってなんだ?」

話すソラの声が震えていた。ソラはナツとは面識がないはずだ。ナツの事なんてどうでもいいと思っっているはずだ。なのに…

グレイは口を開いた。

「…なんでもねえよ、ただの同じギルドのメンバーだ。」

「嘘つくな。はつきり言えよ」

「だから…」

グレイが続けざまに言葉を発しようとするが、ソラの大声がそれを遮った。

「じゃあなんで!!!てめえは泣いてるんだよ!!!」

全員の視線がグレイへ移った。グレイも今になって気づいたのか、そつと自分の下を触る。

「仲間だったんだろ…いや、今でも仲間だ。かけがえのない、何者にも変えられない…家族だったんじゃないのかよ!?!」

「だまれ…」

「黙らねえ」

「黙ってくれ…」

グレイの中でいくつもの記憶が蘇る。

『おいグレイ!!仕事行くぞ!!』

『なんだてめえやんのかグレイ!!』『こっちのセリフだ、クソ炎!!』

『死んで欲しくねえから止めたのに…俺の言葉は届かなかったのか?』

『死ぬことが決着かよ。ああ!?!なめてんじやねえぞコラ!!』

『俺たち…友達だろ？』

『運命なんて…そんなもん俺が燃やしてやる!!』

「ぐっ…く…」

グレイの瞳からは幾度となく涙があふれる。立ち上がろうとしていたが、再び膝を地面につき、ただ…泣いていた。

「なんでだよ…なんで止まんねえんだよ。ちくしょう…!!」

再び辺りが静寂に包まれた。ジユビアはグレイの元に駆け寄り、抱きしめる。

「俺はナツがどんな奴だったのかはルーシイから聞いただけだからわかんねえ。けどな…」

「こんなにも想ってくれる人間がいたのなら…ナツは幸せだったと思うぜ。」

「ソラ…」

ルーシイは不意に呟いた。真剣な眼差しでグレイを見つめるその姿はナツそのものだった。

「なあ…ソラ。お前にとって…ナツはどういう存在になった？」

グレイの問いかけに、ソラは答えた。

「妖精の尻尾 最後までみんなを守り抜き……戦った。ナツは……俺の、いや……」

「俺たちの……誇りだ!!」

「誇り……か……」

そう言いながらグレイは自分の傷に氷を当て、治療をした後立ち上がった。

「続きをやるうぜ……ソラ。俺はまだ、『参りました』なんて言つてねえ」

「後悔するぜ? 負けて」

「上等」

ソラとグレイは互いを睨みつけ合つたまま、ニヤツと笑つた。

互いに後ろに下がり、距離をとる。

そして……

「モード、氷魔。」

グレイの体に黒い紋様が浮かび上がる。氷魔……滅悪魔法だ。

「へえ……まだそんな隠し玉あつたのか……やつぱすげえな。《妖精の尻尾》の魔導士は。」

二人の周りに凄まじいオーラが宿る。これは……奥義!

「ソラの奴…奥義まで使えんのかよ!？」

「やめろおおおお前らアアア!!ギルドがこわれるうううう!!」

え?え?ちよちよちよ…

「ルーシイさん…なだかともまずい気がします…」

「滅竜奥義…!!」

「滅悪奥義…!!」

スレイヤーどうしの奥義対決なんてこんな所でやったら!!

「紅蓮…!!」

「氷魔…!!」

ま、まずい…!!

ソラとグレイは同時に地面を蹴った。距離がだんだんと近づいていく。そして…

「爆炎じ…」 「零ノた…」

「お前は誰だ…む？」

ルーシイはエルザの元へ駆け寄る。

「エルザ、帰ってきたの？」

「む、ルーシイか。ただいまな。それより、これはなんの騒ぎだ。この少年は一体…？」
エルザはほほ気を失っているソラの襟をつかみ持ち上げる。

そんな猫みたいに…。

「そ、それはかくかくしかじか…」

「ほう、そんな事があつたと言うのに…ギルドメンバー誰一人としてコイツらを止めなかつたというわけか…？」

ヒイイイイイイイ!!地雷踏んだアアアアアア!!

「まあいい、ルーシイの処罰はあとだ」

「あたし一人!？」

「グレイ、そしてそこのお前、何か言うことは…」

「ま、まいりました…」

「勝者…エルザ・スカーレット」

マカオの的確な判断に、一同は頷いた。

第三話

運命なんて

???

「《妖精の尻尾》…」

「あのギルドは我々にとって脅威だ。ゼレフ卿を倒し…アキノロギアまでも撃退した。」

暗がりの中、男は自分の前にひざまずく何十人も魔導師に言葉を放った。

「《七つの大罪》、【放漫の罪】、ルシフェル…前へ」

「はっ」

「《妖精の尻尾》の突起戦力、ナツ・ドラグニルの抹殺、ご苦勞であった。この功績を讃え…」

「《七つの大罪》に《新生バラム同盟》の一角を受け渡そう。」

途端、辺りがざわめく。反対する声、賞賛する声、その二つが交わった。

ルシフェルと呼ばれた男は、そのざわめきに耳を貸すことはなく、言った。

「ありがたき幸せ。」

ルシフェルは群衆の中に戻り、再びひざまずく。

それを見届けた男は、言った。

「我々は、ゼレフ卿の意志を継ぐ者である!!アキノロギアによって失われた尊き命を取り戻し、世界を再生するものなり!!」

「《ラスト・イクリップス計画》：開始だ。」

ソラとグレイが戦ってから少し時間が経ち、私たち《妖精の尻尾》メンバーはギルドの酒場に腰をかけている。殆どのメンバーが揃っているが、いないメンバーもいる。ギルドーツ、ラクサスだ。

そして、ギルドメンバーの目線は同じ場所へ。

ギルドマスター《マカロフ・ドレアー》。

ソラは同じ席に座っている私に声をかけてきた。

「あれがマスター？」

「あんた…《妖精の尻尾》に憧れてるって言う割には何も知らないわね。あの人がマスターのマカロフ・ドレアーよ。」

「へえ…じゃああのじいちゃんに声かければ入れるのか？」

「今はそういう雰囲気じゃないでしょ!？」

「まったく…こいつは…」

「お前ら、静かにしろ。マスターがお話になる。」

同じ席に座るエルザが言った。

私とソラは再びマスターに視線を戻し、マスターが口を開くのを待った。そして…

「みな、集まったようじゃな。話を始めさせてもらおう。」

「ワシはこの三日間《イルミナティ》と名乗る組織の影を掴むために、評議院を訪れておった。そして、一つの決定が下った。」

全員が唾を飲む。緊張感が高まり、息が荒くなっていることに気づくのに時間はかからなかった。

マスターの声は落ち着いていたが、その声の深奥に眠る感情の数は計り知れないものがあるだろう。

そして、マスターは口を開いた。

「ワシら《妖精の尻尾》の全勢力を用いて、《イルミナティ》を殲滅させる。これは…《戦争》じゃ!!!」

一瞬の静寂。そして、

「!!!」
「!!!」
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

ギルドメンバー全員が椅子から立ち上がり、拳を上へ高く挙げた。

みんな、この判決を待ち望んでいたのだ。《イルミナティ》の殲滅作戦。

そして、ルーシイも無意識に椅子から立ち上がっていた。次いで、ハッピー、グレイ、エルザ、ウエンデイ、ガジル、シャルル、リリー…。

「それでじいさん!!具体的な作戦はどうするんだ!?!」

グレイの言葉に一同は頷き、マスターに視線を戻す。マスターの顔は真剣で、言った。

「考えとらん!!!」

「だあ!!!」と一同その場に倒れ込む。
い、いい加減ねえ…。

けど、《イルミナティ》は最近になって現れた組織。断片的な情報も明らかになって無
いから、居場所をつかむためには。

「全員でクエストを受けまくる。」

不意にソラが口を開いた。

全員の視線はソラの方を向いた。

「お、おいおい。そんなみんなよ。」

「ソラ、どういうこと?」

あたしが聞くと、ソラは威勢のいい顔で答える。

「そのイルなんとかってのの情報は、まだ分かってねえんだろ? だったら色んなクエストをギルドメンバー全員で受けて、イシユガルの隅から隅まで回るんだ。クエストを着々とクリアすれば、《妖精の尻尾》の知名度は今以上にうなぎ登りだ、イルなんとかの情報も入ってくるんじゃないかねえのか?」

「なるほど、確かに闇雲になってイシユガルを回るより、《イルミナティ》に関するクエ

ストが再び《妖精の尻尾》に入って来るのを待つということか。知名度が上がれば、それに比例してS級、SS級、十年、百年クエストの依頼も入ってくるだろうな。うむ、いい考えだ、ソラ。」

エルザはソラに意見に賛同すると、マスターに視線をずらし、聞いた。

「いかがでしょうか、マスター。ソラの作戦を採用するというのは」

マスターはソラを見つめる。ソラもマスターを見る。互いに視線をぶつけ合わせる時間が数秒続いた。

「ソラ…と言ったな。こちらへ来い」

ソラは立ち上がり、マスターの方に向かって歩いていく。メンバーは意識的にか無意識にか、ソラにマスターまでの道のりを譲った。

ソラはカウンター席の前に立ち、マスターをながめる。

マスターは薄く笑うと、いった。

「これも…運命か。ナツによく似ておる。」

ソラは視線を横にずらした。

「もうそれは沢山聞いたよ。何番煎じだったの…。」

「そうじゃろうなあ。ソラよ…お前は、ワシらと共に希望の明日あすを歩くことが出来るか？ 絶望の明日を受け入れることは出来るか？」

ソラは一度黙る。

「そんなの知らねえよ。明日あしたが来るかなんて、誰にもわからねえからな。ただ：明日を作るのなら出来る。だから俺は《妖精の尻尾》の明日を作ってやる。その道を、明日を、俺はじーちゃん達妖精の尻尾と歩くためにここに来た。俺は絶望なんて作る気はねえ。」

「それが例え、《運命》だとしてもか？」

「そうだとしても」

ゴオ!!

ソラの右手が炎で覆われた。その炎は先程グレイと戦った時よりも遥かに強く、そして、とても優しい炎だった。

ソラが次に発する言葉に、ナツの声が被さった。

『《運命》なんて：俺が全部燃やしてやるよ。』

その言葉にマスターは、笑った。

「その《覚悟》：しかと心に植え付けた！お前は今日から、」

ソラの肩に、紋章が浮かび上がる。

それは、尻尾のある妖精：。

「《妖精の尻尾》のソラ・ドラコチエインじゃ!!」

「おっす!!!」

眩い光がソラを包み込み、弾けた。ソラの肩には赤い《妖精の尻尾》の紋章が浮かび上がった。

「ソラの作戦を使う!!お前ら、仕事じゃあアアア!!」

「うおおおおおおおおおおおおお!!」

ソラは自分の肩の紋章を確認し、不敵な笑みを浮かべると、後ろを振り向く。

そこに立っていたのは、六人の仲間達。

ルーシイ、ハツピー、グレイ、エルザ、ウエンデイ、シャルル。

全員は顔を見合わせ、頷いた。

この運命が絶望なのか、希望なのか、それは誰にもわからないことだ。
運命が残酷だと知るのは…あとすこし先のこととなる。